

## 15. 特殊構文

### 1.

次の日本語に合う英語になるように( )内の語を並べかえなさい。

(1) 彼らは会えば必ずけんかをする。

( without / never / . / they / quarreling / meet )

(2) 彼はめったに人とけんかをしない。

( quarrels / seldom / . / others / he / with )

(3) 彼女の答えは完璧どころではない。

( is / but / answer / perfect / . / her / anything )

[解答]

- (1) They never meet without quarreling.
- (2) He seldom quarrels with others.
- (3) Her answer is anything but perfect.

## Note

### 15. 特殊構文

#### 1. 否定表現

(1) 彼らは会えば必ずけんかをする。

They / never meet / without quarreling.

never ... without ~ing

「…すれば必ず～する」 ← 「～なしでは決して…ない」

一文の中に否定語が2つあり、それらが打ち消しあって肯定の意味になることを「二重否定」といい、具体的には次のような表現になります。

① never ... without ~ing

「～なしでは決して…ない」 → 「…すると必ず～する」

② never ... but S V

「～せずに…は決してない」 → 「…すると必ず～する」

※この but は、「～しないでは、～せずには」  
の意味の接続詞。

- ① I never read this book without finding a new meaning.  
 (新しい発見をせずに私はこの本を決して読まない。  
 →この本を読むと必ず私は新しい発見をする。)
- ② It never rains but it pours.  
 (土砂降りにならずに雨が降ることは決してない。  
 →雨が降ると必ず土砂降りになる。)

(1)の問題では「…会えば必ずけんかをする」なので、この二重否定の表現を使って、**never meet without quarreling** の語順を作りましょう。

## Note

(2) 彼はめったに人とけんかをしない。

He seldom quarrels with others.

「めったに～ない」

「～とけんかをする」

「ほとんど～ない」や「めったに～ない」などの否定に近い表現を「準否定」といいますが、程度や頻度を表す準否定の表現に次のようなものがあります。

- |                  |        |          |
|------------------|--------|----------|
| ① 程度 (ほとんど～ない) : | hardly | scarcely |
| ② 頻度 (めったに～ない) : | rarely | seldom   |

- ① I could scarcely recognize my old friend.  
 (旧友を見ても私はほとんど誰だかわからなかった。)
- ② He rarely goes to the movies.  
 (彼はほとんど映画を見に行かない。)

これら準否定語は、一般動詞の前、be 動詞や助動詞の後に置かれます。

(2)の問題では「…めったに…けんかをしない」ですので、*seldom quarrels* の語順で英文を作りましょう。

## Note

(3) 彼女の答えは完璧どころではない。

Her answer is anything but perfect.

「～では決してない、～どころではない」  
←「～以外の何でも」

否定語を使わない否定表現や否定語を用いた慣用表現には次のようなものがあります。

- ① *far from* ～ 「決して～ではない」 ← 「～からほど遠い」
- ② *the last ... to* ～ 「決して…しない～」 ← 「～する最後の…」
- ③ *fail to* ～ 「～しない、～できない」  
※*never fail to* ～ 「必ず～する」 ← 「決して～し損なわない」
- ④ *free from* ～ 「～がない」 ← 「～から自由だ」
- ⑤ *beyond* ～ 「～できない、～の及ばない」 ← 「～を超えて」
- ⑥ *nothing but* ～ 「～以外の何もない、～だけ、～に過ぎない」
- ⑦ *anything but* ～ 「～では決してない」 ← 「～以外の何でも」
- ⑧ *not ... anything but* ～ = *nothing but* ～ 「～に過ぎない」
- ⑨ *not ... until* ～ 「～するまで…しない、～して初めて…する」  
※強調構文で *It is not until ... that ...* の形もある。

(3)の問題では「…完璧どころではない」となっていますので、*anything but perfect* の語順にして英文を組み立ててください。

## 2.

次の日本語に合う英語になるように( )内の語を並べかえなさい。

(1) その花瓶を壊したのは私のいとこだった。

( cousin / broke / was / . / vase / that / it /  
the / my )

(2) 私のケーキを食べたのはいったい誰だ。

( that / was / ? / cake / it / my / who / ate )

(3) 彼女は本当にやって来たが、すぐに帰った。

( but / back / did / . / went / soon / she / come )

(4) これはまさに私が一番好きな本です。

( is / I / very / best / . / like / this / book /  
the / the )

[解答]

- (1) It was my cousin that broke the vase.
- (2) Who was it that ate my cake?
- (3) She did come but soon went back.
- (4) This is the very book I like the best.

## Note

### 2. 強調

(1) その花瓶を壊したのは私のいとこだった。

It was my cousin that broke the vase.

強調構文

It is[was] ... that ~

「～なのは…である[であった]」

「花瓶」

伝えたい内容を強調する表現の一つに、次の「強調構文」があります。

[強調構文]

It is+(強調したい部分)+that ~ 「～なのは…である」

強調できるのは、①主語、②目的語などの名詞、③副詞(句、節)に限られる。動詞、形容詞は強調できない。

- ①主語 It was Tomoko that visited Kyoto with me last summer.  
(昨年夏に私と京都を訪れたのは、友子でした。)
- ②目的語 It was Kyoto that Tomoko visited with me last summer.  
(昨年夏に友子が私と訪れたのは、京都でした。)
- ③副詞句 It was last summer that Tomoko visited Kyoto with me.  
(友子が私と京都を訪れたのは、昨年の夏でした。)

強調する主語や目的語によっては、次の形の強調構文もあります。

- ①「人」の場合… that の代わりに who や whom も可。ただし、  
目的語のときは that を用いるのが一般的。
- ②「物」の場合… that の代わりに which も可。  
ただし、きわめて少ない。

- ①主語 It was Tomoko who visited Kyoto with me last summer.  
(昨年夏に私と京都を訪れたのは、友子でした。)
- ②目的語 It was Kyoto which Tomoko visited with me last summer.  
(昨年夏に友子が私と訪れたのは、京都でした。)

なお、強調構文の that は省略されることがあります。

It was this window <sup>^</sup> Alex broke yesterday.

that の省略

(アレックスが壊したのはこの窓でした。)

## Note

(2) 私のケーキを食べたのはいったい誰だ。

Who was it that ate my cake?

疑問詞と強調構文の組合せ  
「～なのはいったい誰だ」

強調構文には、疑問詞を強調する次の形があります。

〔疑問詞の強調〕 疑問詞 + is it that ～?

Who is it that is looking for this book?

(この本を探しているのはいったい誰ですか。)

(2)の問題では「…のはいったい誰だ」なので、この表現を使って **Who was it that** で文を始めることになります。

## Note

(3) 彼女は本当にやって来たが、すぐに帰った。

She did come but soon went back.

動詞の強調  
do[does/did] + 動詞の原形  
「本当に、間違いなく」



その他の強調の表現としては、次のようなものがあります。

- ① do を用いた強調…動詞を強調。do [does, did]を動詞の原形の前に置く。「本当に」「間違いなく」と訳す。
- ② very を用いた強調…名詞を強調。「まさに」「～こそ」の意味。
- ③ 疑問詞の強調…疑問詞の後ろに on earth や in the world, everなどを置く。「いったい」などと訳す。
- ④ 否定の強調…否定語よりも後に at all, a bit, in the least, by no meansなどを置く。「まったく～ない」の意味。
- ⑤ 同一語の繰り返しによる強調…同じ語を and を使って強調。
- ⑥ All S have[has] to do is (to) do の表現…「～しさえすればよい」
- ⑦ 関係代名詞 what の強調表現…主語になる what 節で強調。

- ① He did hope he had passed the test.  
(その試験に合格していることを彼は本当に願った。)
- ② This is the very city that I wanted to visit.  
(これはまさに私が訪れたかった都市です。)
- ③ Why on earth are you crying?  
(いったいなぜあなたは泣いているのですか。)
- ④ He was not in the least interested in the subject.  
(彼はその科目に少しも興味を持っていなかった。)
- ⑤ She sang the song again and again.  
(彼女は繰り返し繰り返しその歌を歌った。)
- ⑥ All you have to do is read this book.  
(あなたはこの本を読みさえすればよい。)
- ⑦ What you have to do is clean your room.  
(君がしなければならないのは、自分の部屋をそうじすることだ。)

(3)の問題では「…本当にやって来た」となっていますので、動詞を強調する形を使って、did come とすることになります。

## Note

(4) これはまさに私が一番好きな本です。

This is the very book I like the best.

very を使った名詞の強調  
the[this, that など] very+名詞  
「まさに～、～こそ」

関係代名詞  
目的格の省略

「一番好き」

(4)の問題では「…まさに私が一番好きな本…」となっていますので、②の「very を用いた強調」を使って、the very book I like the best としましょう。book と I の間には関係代名詞の目的格が省略されています。

### 3.

次の日本語に合う英語になるように( )内の語を並べかえなさい。

(1) 上の方へ気球は上っていった。

( went / . / balloon / up / the )

[up で始める]

(2) この町の人々は実に幸せです。

( are / town / people / . / this / happy / in /  
the )

[happy で始める]

(3) 決して私はあなたのことを忘れません。

( forget / will / . / you / never / I )

[never で始める]

(4) クラシック音楽が私たちはとても好きです。

( music / much / like / . / we / classical / very )

[classical で始める]

[解答]

- (1) Up went the balloon.
- (2) Happy are the people in this town.
- (3) Never will I forget you.
- (4) Classical music we like very much.

## Note

### 3. 倒置

(1) 上の方へ気球は上っていった。

Up / went / the balloon.

副詞

「上へ」

倒置

副詞句を文頭に置くと一般動詞  
自体を前に出す倒置が起こる。

特定の語句を文頭に出すと〈(助)動詞＋主語〉の語順に変わることを「倒置」といいますが、倒置には次の2種類があります。

- ① 一般動詞自体を主語の前に出す倒置
- ② 疑問文の語順にする倒置

- ① Down came the rain. (雨が落ちてきた。)

一般動詞    主語

② Little did I think that she would fail.

疑問文の語順

(彼女が失敗するだろうとはほとんど思いもしなかった。)

倒置になるのは、次のような場合です。

① 副詞句を文頭に置いた倒置

…場所や方向を表す副詞(句)が文頭に置かれると倒置になる。

この場合、一般動詞自体を主語の前に出す倒置になる。

※ただし、主語が代名詞のときは倒置にはならない。

② 補語を文頭に置いた倒置

…主語が長い文などで、補語を文頭に出して倒置になること

がある。この場合、疑問文の語順にする倒置になる。

※ただし、主語が代名詞のときは倒置にはならない。

③ 否定語を文頭に置いた倒置

… **never** などの否定後が文頭に置かれると倒置になる。

この場合、疑問文の語順にする倒置になる。

① Out went the light. (明かりが消えた。)

副詞

一般動詞自体を出す倒置

② Lucky was the man who caught the ball.

補語

疑問文の語順の倒置

(そのボールを捕った人は幸運だった。)

③ Never have we been so lucky.

否定語

疑問文の語順の倒置

(私たちはこんなに幸運だったことは一度もない。)

(1)の問題では、[up で始める]と副詞を文頭に置く指示がありますので、一般動詞自体を主語の前に出す倒置の語順にして、**Up went the balloon.** の文を作りましょう。

また、副詞句を文頭に置いた場合でも、主語が代名詞のときは倒置にはならないことに注意してください。

Down it came. (それが落ちてきた。)

さらに、there や here が文頭に置かれると倒置が起こりますが、このときも、主語が代名詞の場合は倒置にはならないことに気を付けましょう。

Here comes Jane. (ジェーンがやって来る。)

Here she comes. (彼女がやって来る。)

## Note

(2) この町の人々は実に幸せです。

Happy / are / the people / in this town.

補語

倒置

補語を文頭に出すと倒置になる。

(2)の問題では、[happy で始める] と補語を文頭に置く指示がありますので、疑問文の語順にする倒置にして、Happy are the people で文を始めましょう。

また、補語を文頭に置いた場合でも、主語が代名詞のときは倒置にはならないことに注意してください。

Very happy we were. (私たちはとても幸せだった。)

## Note

(3) 決して私はあなたのことを忘れません。

Never will I forget you.

否定語

倒置

否定語を文頭に出すと倒置が起こる。

(3)の問題では、[never で始める] と否定語を文頭に置く指示がありますので、疑問文の語順にする倒置にして、**Never will I forget** で文を始めます。

倒置になる否定語には次のようなものがあります。

〔否定を表す語句〕

**never** (一度も～ない、決して～ない)

**little** (ほとんど～ない)

**rarely, seldom** (めったに～ない)

**hardly, scarcely** (ほとんど～ない)

**under no circumstances** (どんな状況でも～ない)

**on no account** (決して～ない)

なお、**only** は「～しかない」で否定に近い語なので、語句を伴って文頭にくると、しばしば倒置が起こります。

**Only in this park can we play baseball.**

(この公園でしか、私たちは野球することができない。)

## Note

(4) クラシック音楽が私たちはとても好きです。

Classical music we like very much.

目的語

※目的語が文頭に出ても  
通常、倒置は起こらない。

目的語を強調するために文頭に出すことがあります。このときの語順は次のようになります。

目的語を文頭に出しても倒置にはならない。

That kind of story she never believes.

目的語

主語

動詞

(その種の話を決して信じない。)

(4)の問題では〔**classical** で始める〕と目的語を文頭に置く指示がありますが、目的語は文頭に出しても倒置は起こりませんので、**Classical music we like** の語順にすることになります。



次の日本語に合う英語になるように( )内の語を並べかえなさい。

(5) 私はネコが好きです。私もです。

( like / . / I / cats ) ( do / I / so / . )

(6) 私はサッカーが好きではない。私もです。

( don't / . / soccer / I / like )

( I / do / neither / . )

(7) 今日は暑いですね。本当にそうですね。

( hot / is / . / it / today )

( is / . / so / it )

[解答]

(5) I like cats. So do I.

(6) I don't like soccer. Neither do I.

(7) It is hot today. So it is.

## Note

(5) 私はネコが好きです。私もです。

I/like/cats.

So/do/I.

So+(助)動詞+主語  
「~もそうだ」

倒置には、so や neither, nor を文頭に置いた次のようなものもあります。

- ① So+(助)動詞+主語. 「~もそうだ」
- ② Neither[Nor]+(助)動詞+主語. 「~もそうではない」

- ① He passed the test. So did I.  
(彼はその試験に通った。私もそうだ。)  
She is a high school student. So am I.  
(彼女は高校生です。私もそうです。)
- ② He didn't pass the test. Neither did I.  
(彼はその試験に通らなかった。私も通らなかった。)  
You can't play the violin. Neither can I.  
(あなたはバイオリンが弾けない。私も弾けない。)

(5)の問題では、前の文の一般動詞 like を受けて「私もです。」と言っているので、①の〈So+(助)動詞+主語.〉の表現を使って、So do I.とすることになります。もし「彼もです。」なら、So does he.とします。

## Note

(6) 私はサッカーが好きではない。私もです。

I/~~don't like~~/soccer.

Neither/~~do~~/I.

neither+(助)動詞+主語  
「~もそうではない」

(6)の問題は、前の否定文を受けて「私もです。」と言っているなので、②の〈Neither[Nor]+(助)動詞+主語.〉の表現を使って、Neither do I.としましょう。もし「彼もです。」なら、Neither does he.とします。

## Note

(7) 今日は暑いですね。本当にそうですね。

It/is/hot today.

天候を表す主語 it

So/it/is.

So+主語+(助)動詞  
「(主語)は(まさに)そのとおりです。」

(5)の英文で出てきた〈So+(助)動詞+主語〉と紛らわしいものに次のような表現があります。

So+主語+(助)動詞 「(主語)は(まさに)そのとおりだ」

You have spilled your coffee.

(コーヒーがこぼれましたよ。

Oh, so I have.

あら、そうですね。)

(7)の問題では、前の文が主語は it で動詞は be 動詞の文なので、それを受けて So it is. としましょう。

## 4.

次の日本語に合う英語になるように( )内の語を並べかえなさい。

(1) 子どものとき、彼女はカナダに住んでいた。

( a / in / she / , / when / Canada / . / lived /  
child )

(2) 彼は、言わば、生き字引でした。

( a / was / walking / it / , / were / he / . /  
as / dictionary )

(3) 彼女が成功したという知らせは私を驚かせた。

( that / me / news / surprised / . / she / the /  
succeeded )

(4) 彼は家族と一緒に外国へ行くという考えを  
持っていた。

( idea / going / had / . / family / of / he /  
his / abroad / the / with )

[解答]

- (1) When a child, she lived in Canada.
- (2) He was, as it were, a walking dictionary.
- (3) The news that she succeeded surprised me.
- (4) He had the idea of going abroad with his family.

## Note

### 4. 省略・挿入・同格

- (1) 子どものとき、彼女はカナダに住んでいた。

When a child, she lived in Canada.

↑  
she was の省略  
主節の主語と同じとき、  
主語と be 動詞は省略できる。

次のような場合、語句を省略することがあります。

- ① 主語・動詞の省略  
when, while, if, unless, though, even if などの副詞節の中の主語と主節の主語が同じ場合、副詞節の主語と be 動詞は省略されることが多い。

② 共通部分の省略

繰り返しをさけるために、既出の語を省略することがある。

③ 共通構文

2つの英文で語句が共通しているとき、重複を避けて省略することがある。

① They talked about the test while  $\wedge$  going home on the train.

they were の省略

(彼らは電車に乗って家に帰る間、そのテストについて話した。)

② He said he would fail, but he didn't  $\wedge$ .

fail の省略

(失敗するだろうと彼は言ったが、失敗しなかった。)

③ He was surprised but  $\wedge$  glad to hear that.

he was の省略

(それを聞いて彼は驚いたがうれしかった。)

①の主語・動詞の省略で、慣用表現として次のものがあります。

if any (もしあれば、たとえあったとしても)、

if possible (もし可能なら)、if necessary (もし必要なら)

(1)の問題では「子どものとき…」となっていますが、与えられている単語から考えて、she was を省略し、when a child としましょう。

## Note

(2) 彼は、言わば、生き字引でした。

He was, as it were, a walking dictionary.

「言わば、言ってみれば」

「生き字引、歩く辞書」

説明を加えたり、話し手の気持ちをより明確にしたりするため、前後にコンマを付けて、語や句、節を文の途中または最後に入れることを「挿入」といいます。挿入には次のようなものがあります。

- ① 節の挿入…節(主語+動詞)が文中に挿入されることがある。
- ② 語句の挿入…語句が文の途中に挿入されることがある。

- ① Mr. Green, it seems, has nothing to do with the matter.  
(グリーンさんはその事件には全く関係がなさそうである。)
- ② Her career is, so to speak, a kind of Cinderella story.  
(彼女の経歴は、言わば、ある種のシンデレラストoryです。)

挿入される表現には次のようなものがあります。

- ① よく使われる挿入節
  - it seems (～らしい)                      I'm afraid (残念ながら)
  - I suppose (思うに)                      I'm sure (きっと)
  - I hear (聞くところによると)      as you know (ご存じのとおり)
- ② よく使われる挿入句
  - so to speak (言わば)                      after all (結局)
  - as a result (結果として)              in fact (実際は、要するに)
  - by the way (ところで)                  for example (たとえば)
  - in other words (言い換えると)



(2)の問題では「言わば」の意味の慣用表現 *as it were* を *a walking dictionary* の前に挿入して英文を作りましょう。

## Note

(3) 彼女が成功したという知らせは私を驚かせた。

The news **that** she succeeded surprised me.

同格の that  
「～という…」

succeed 「成功する」  
の過去形

surprised 「驚かす」  
の過去形

英語では、ある名詞などにさらに詳しい説明を加えるとき、その後にその名詞などを説明する名詞(句・節)を置くことがあります。これらの名詞の関係を「同格」といいます。

同格には次のようなものがあります。

- ① 同格語(句)の並列…名詞の後に、さらに具体的に説明する語句を置く。
- ② 同格を表す **that** 節…接続詞 **that** で同格の語句を導くことがある。 **A that** ～ 「～という A」
- ③ 同格の **of**…前置詞 **of** で同格の語句を導くことがある。  
**A of** ～ 「～という A」

- ① **We, the players, promise to do our best in the game.**  
(我々選手一同は、全力を尽くして試合をすることを誓います。)
- ② **He will be happy about the news that we're going to London.**  
(私たちがロンドンに行くという知らせに、彼は喜ぶでしょう。)
- ③ **We didn't know the fact of her meeting him.**  
(彼女が彼に会ったという事実を私たちは知らなかった。)

(3)の問題では、「彼女が成功したという知らせ…」を同格の接続詞 **that** を使って、**The news that she succeeded** としましょう。

## Note

(4) 彼は家族と一緒に外国へ行くという考えを持っていた。

He had the idea of going abroad

同格の of  
「～という…」

go abroad 「外国へ行く」  
の動名詞

with his family.

「家族と一緒に」

(4)の問題は「…家族と一緒に外国へ行くという考え…」となっていますので、同格の前置詞 **of** を使って、**the idea of going abroad with his family** することになります。

